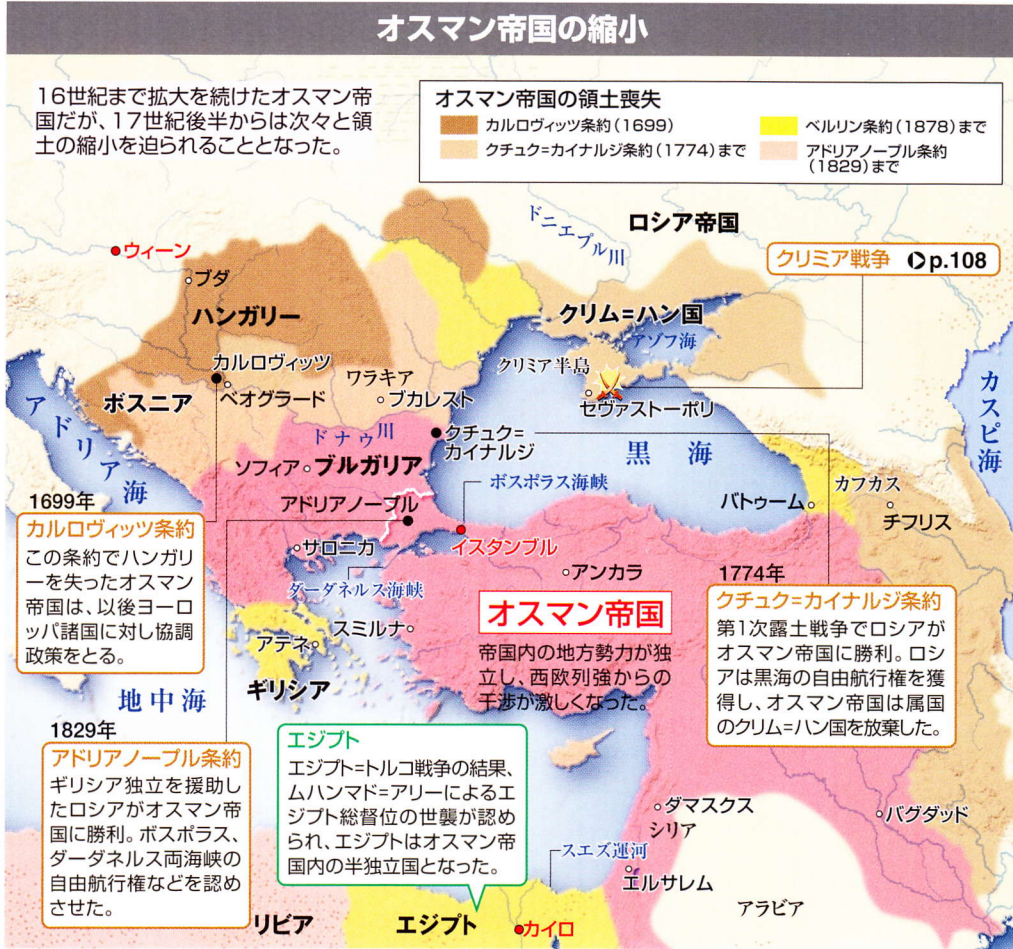


衰退し、解体へ向かう オスマン帝国



勢力の衰退した
オスマン帝国は、
改革の動きも実らず、
解体への道を進む。

オスマン帝国の衰退と 地方勢力の台頭

16世紀には最大版図となったオスマン帝国だが、17世紀になるとその勢いは衰えはじめた。1683年の第2次ウィーン包囲に失敗してハンガリーの大半を失うと、続く18世紀にはエジプトやシリアなどで地方豪族が台頭し、中央集権体制にほころびが生じるようになった。

18世紀後半、ナポレオン(P102参照)に占領されたエジプトをイギリスと結んで奪還したオスマン帝国だったが、その混乱のなか、傭兵隊を率いたムハンマド=アリーがエジプト総督となってエジプトの実権を握った。ムハンマド=アリーはオスマン帝国の命を受け、アラビア半島のワッハーブ王国を制圧したほか、1821年に始まったギリシア独立戦争を鎮圧するため出兵した。その後、列強の干渉によりギリシアは独立を果たすが、エジプトは出兵の見返りにシリアの領有を要求。これを拒否したオスマン帝国と2度にわたってエジプト=トルコ戦争を戦った。

列強による干渉と 解体に向かうオスマン帝国

ギリシア独立戦争やエジプト=トルコ戦争をきっかけに、オスマン帝国は東地中海や黒海周辺の利権を争う英・仏・露といっ

た列強の介入を招くこととなった(東方向題)。こうした事態に対し、オスマン帝国は行政組織などの西欧化を目指すタンジマート(恩恵改革)を実施するが、十分な成果は上がらなかった。

1853年に始まったロシアとのクリミア戦争では、英・仏の支援によって勝利したものの、その戦費によって財政が破綻。76年には、改革派の宰相ミドハトパシャが起草したイスラーム世界初の近代憲法であるミドハト憲法が公布されたが、77年にロシア=トルコ戦争が勃発すると、スルタンのアブデュルハミト2世が憲法を停止し、専制政治を復活させた。

また、ムハンマド=アリー朝の統治が認められたエジプトも、スエズ運河の建設などで列強に対し多額の債務を負い、以後、経済的に列強に従属することとなった。

ギリシア独立に肩入れ した西欧の知識人

ギリシアで独立戦争が起きると、西欧の知識人や芸術家たちは「われわれの文明の先駆者である古代ギリシア人の子孫をオスマン帝国の圧政から救おう」との思いから、独立軍を支援した。イギリスの詩人バイロンは義勇軍を組織して戦闘に加わり、フランスの画家ドラクロワは「キオス島の虐殺」を描いてオスマン軍の残虐ぶりをアピールした。しかし、古代のギリシアと19世紀のギリシアは別物であり、独立後は「ギリシア人とは何か」という問題が生まれることとなる。



Key Word **タンジマート**

オスマン帝国末期の西欧化改革で「恩恵改革」と訳される。1826年のイエニチェリ軍団廃止に始まり、39年のギュルハネ勅令、76年の憲法制定などを含む。宗教を問わずオスマン帝国臣民の平等を宣言し、税制改革、議会設置、西欧的軍制の導入などの改革を行った。しかし、殖産興業などの経済改革は行われなかった。